

められており、これによって収集された古文書類は、享保十二年に着手される官撰史書「津軽一統志」の編さんに活用された。「津軽一統志」編さんはすでに指摘されるように、系譜認識や歴史認識を基礎とした津軽家の自己認識を形成する性格を有していたものであって（長谷川成一『北奥羽の大名と民衆』（清文堂、二〇〇八年）など）、そこには役所における職務遂行の効率化といった側面は見いだせられないのである。藩の事例ではあるが、古文書に対する認識は幕府においても同様であったと思われる。

的外れな指摘をしてしまったことを著者にお詫び申し上げます。本書で示された近世国家論が、さらなる実証的な検証の積み重ねによって深化されることを期待したい。

（A5判、三五八頁、吉川弘文館、二〇一三年七月刊、

価格二一五五〇円〈税込〉）

（つたや・だいすけ 青森県史編さんグループ非常勤嘱託員）

河西英通・浪川健治編

『グローバル化のなかの日本史像』

——「長期の一九世紀」を生きた地域——

清水 光明

はじめに

本論集は、「地域史から世界史を構築する」という戦略の下に編集された興味深い企画である。編者（河西氏）の説明によると、すでに刊行された『ローカルヒストリーからグローバルヒストリーへ——多文化の歴史学と地域史——』（岩田書院、二〇〇五年）^①、『周辺史から全体史へ——地域と文化——』（清文堂、二〇〇九年）^②に続く第三弾とのことである（「跋」を参照）。多様な書き手（十名）による、力のこもった論文が並ぶ。

本稿では、本論集に収録された論考の内容をそれぞれ紹介し、その上で若干の論評を試みることにしたい。とはいえ、評者の専攻は、日本近世史・思想史である。近世中後期を研究しているという点の本論集の内容の一部とも或る程度重なるが、地域史や地域社会論やグローバル・ヒストリーの研究動向には不案内である。したがって、評者は、これらの多彩な論考——主に取り上げられる地域は東北、そして対象とする時代は近世中後期から近代・現代に及ぶ——をトータルに論評する能力も資格も到底持ち合わせていない。

ただ、苦し紛れな言辞を弄すると、一、日本史研究者（評者）には本論集（及びその前提に存する企画の方向）はどのように映るか、という点での証言や覚書程度なら何とか捻り出すことができるかもしれない。それが（少しでも）何かの足しになればという一縷の望みを懐きながら、無知を省みずに本論集の論評に取り掛かる次第である。

1 目次と課題設定

本論集の目次は、以下の通りである。

序

浪川健治

I 近世の危機とリスク

一八世紀におけるリスクとしての飢饉

— 社会的リスクとしての寛延飢饉 —

浪川健治

文化期下北における内憂外患と「兵役」構想

— 「当地の防、当地に限」 —

吉村雅美

秋田県阿仁銅山掛山における御用焼木生産

— 近世後期の請負生産と森林資源の持続的利用技術 —

芳賀和樹

II 移行期の国家と地域

幕末維新时期における洋学の受容と展開

— 大島惣左衛門の「御国益」論と「治国」の学術 —

岩本和恵

転換期の恐怖 — 「弘前事件」をめぐる近世と近代 —

河西英通

明治青年の一時帰郷と日本ナシヨナリズム

— 宮崎湖処子『帰省』を中心に —

鈴木啓孝

III 地域の発見と主張

朝河貫一と入来文書の邂逅 — 大正期の地域と歴史をめぐる環境 —

佐藤雄基

東北振興政策と人口問題

川内淳史

戦後思想としての東北 — 高橋富雄を中心に —

ネイソン・ホブソン

遺骨は語る — アイヌ民族と人類学倫理についての考察 —

アンエリス・ルアレン

跋

河西英通

次に、本論集の目標や課題設定について、「序」と「跋」の内容から確認しておく。

冒頭の、浪川氏による「序」は、本論集の表題に掲げる「グローバル化」を、「何らかのために行われる過程ではなく、それ自身が目的として行われる無限の過程」と定義する（五頁）。その上で、この「グローバル化」の日本における展開を批判的に——且つ、あくまで歴史学として——捉えるべく、人々が自らの生産や生活に基づいて形成した「地域」の多様な経験を長期的なスパンで検討する必要が主張される。

最後の、河西氏による「跋」では、すでに幾つかの問題点も指摘されている既存のグローバル・ヒストリーの研究動向と、近代日本史学史上に垣間見えるグローバル・ヒストリーへの模索と逡巡の模様（朝河貫一と、彼に影響を受けた人々の動向）との双方を踏まえながら、「地域」からグローバル・ヒストリーを構築するという戦略と、そのための具体

的な構想とが併せて提示される。

なお、上記の「序」「跋」の内容とも重なるが、本論集の課題設定やその特色を、既刊の二冊の論集の序章・終章も踏まえながら最大公約数的にまとめると、以下の三点を挙げることができる。

① 地域史の視点からの日本史像・世界史像の再編成

② 近世／近代という時代区分の再考

③ 日本史研究の「グローバル化」

①では、日本史や国家史に固着（従属）した地域史からの脱却と、地域史による「日本史」の相対化とが主張される^③。その際、日本史という枠組みを括弧に入れ、「多文化としての歴史学」を構築することが目指される^④。②では、国家と地域の相克を長いスパンで捉えるべく、本論集の副題にも掲げられている「長期の一九世紀」という視点を導入する必要が説かれる^⑤。③では、日米両国の日本史研究についての動向に目配りすることで、自国史・他国史としての地域史の二重性に留意し、かつ様々な研究領域を横断する地域史の複合的・多重的性格を掘り下げていくことが目指される^⑥。

以上の①～③を踏まえると、研究内容の刷新と研究環境の工夫とが、「グローバル化」という不可避の潮流において分かちがたく連動しているところに、（既刊の二冊の論集を含めた）本論集の課題設定の狙いや戦略を見出すことができる。つまり、日本史研究の「グローバル化」を推し進めることで国内外の幅広い日本史研究者を糾合し、そのことで

「地域」を具体的かつ長期的スパンで捉える視点を多様化し、「グローバル化」の日本における展開を歴史学として捉え直そう、というわけである。論文集という形式は、そのための有益なプラットフォームになりうるだろう。

2 議論の要約

まず、第I部に配された三本の論文を要約する。ここには、飢饉、内憂外患、諸品値段高騰にともなう請負生産の動揺等、近世中後期の日本社会（主に、東北地方）における様々な「危機」を扱った論考が並ぶ。

浪川論文では、寛延二年の飢饉に際しての弘前藩の対応と、その背景に存する領主的流通統制の動揺とが併せて検討される。従来、飢饉の原因については、いわゆる「飢饉移出」論によって説明されることが多かった。それに対して、本論文は、「抜米」「抜荷」の横行による米の払底と、それに関与する広範な被治者の存在（上農層・地主・在方商人、幹旋・仲介者、船持層等）に着目し、彼らの結合と支配体制との間の矛盾が引き起こした「社会的リスク」として、この寛延飢饉を捉え直そうとする。

吉村論文では、盛岡藩下北の町役人・村林原助の動向と、情報収集にもとづく彼の政治構想とが検討される。従来、原助は、民衆の「抵抗」を主導した町役人として評価されてきた。それに対して、本論文では、民衆の負担を軽減することに努めつつも、ロシアへの防備の必要性を認識し、「兵役」構想を模索する原助の姿を描き出す。その際、源助が得

た最新の海外情報（林子平『三国通覧図説』『海国兵談』、志筑忠雄訳『鎖国論』等）の性格と、既存の知識（新井白石『折たく柴の記』、『山下幸内上書』等）の活用に着目する。

芳賀論文では、秋田藩阿仁銅山の精錬過程で消費された薪（阿仁銅山御用焼木）について、近世後期（文化〜天保期）の請負生産の様態・変容と、その生産の基礎となった森林資源の持続的利用技術とを併せて検討する。阿仁銅山の開発と発展による森林資源の減少、諸品値段高騰にともなう請負生産の動揺、洪水による流木等の様々な問題に対して、秋田藩は番山繰の再編と川下げ仕法の改正、「台切」と呼ばれた鋸の導入等によって、森林資源の持続的利用を図ったとする。

次に、第Ⅱ部の三本の論考の要約に移る。ここには、近世近代移行期における国家と地域の相克を、具体的な個人や事件に即して詳細に検討した論考が配されている。

岩本論文では、盛岡藩士であり洋学者であった大島惣左衛門（のちの大島高任）の国家像・学問観とそれらの変容とを、彼の意見書を素材として検討する。当初、「御国産方頭」として盛岡藩の殖産政策に関わっていた大島は、藩の政治課題として「御国益」を捉え、その「御国益」を実現するための新たな知識・技術として洋学を位置づけていた。それが、文久二年に蕃所調所出役教授手伝に任じられ、幕府にも関わるようになったことで、「皇国」と藩とを「御国益」を媒介にして関係づけ、「治国の要」として「西洋学」と人材とを位置づけるようになるとする。河西論文は、従来、進歩派対反動派の構図のもとに捉えられてきた弘

前事件（旧藩校稽古館の後身東奥義塾を拠点とした、一八八一〜八二年の民権運動）を、自由民権運動のリーダー・本多庸一の答申書と、反民権派の笹森儀助の書簡とを対照させながら詳細に辿り直す。その結果、両派の関係は当初は意外に近かったことや、反民権派も必ずしも一枚岩ではなかったこと、そしてその後両派の対立が激化した背景には「地域」の現状認識の相違——前者は東北の周縁性からの脱却のために民権運動を推し進め、後者は地域に基盤（人材や経済力）を持たない国会開設運動を危惧する——が存すること等が明らかとなる。

鈴木論文では、宮崎湖処子（八百吉）の自伝的小説『帰省』——明治時代のベストセラー小説——を取り上げ、明治二十年代のナショナリズムである「平民主義」と故郷の問題を検討する。具体的には、湖処子の郷里（筑前国下座郡三奈木村）での人間形成の過程、上京の経緯、一時帰省のときの様子等を辿る。その上で、郷里における競争の勝者として離郷した彼が、上京時の煩悶や挫折を経て、帰省の際に感じた孤独かつての競争の敗者（武士の子供等）への哀れみとを介して、立身出世競争の犠牲者としての自分たち（の「平民主義」による連帯可能性）を見出すまでを描く。

引続き、第Ⅲ部の四本の論考を要約する。ここには、戦前・戦後の史的考察と、戦前の地域開発から垣間見える東北認識とその変容等を慎重に検討した論考が並ぶ。

佐藤論文では、戦前、イェール大学で教鞭をとった歴史家・朝河貫一を取り上げる。朝河は、日本留学中の一九一九年六月、偶然、「入来院

文書」（薩摩の入来院氏の家伝文書）に出会い、その後、その一部を『入来文書』（The Documents of Iriki）として一九二九年にアメリカとイギリスで出版する。本論文は、その経緯を、彼が日本留学中に関係した中央のアカデミズム（東京帝国大学史料編纂掛等）や地元名士・郷土史家のネットワークの様相を踏まえながら、丁寧な跡付ける。

川内論文は、戦時下における東北認識の変化を考察する。具体的には、一九三〇〜四〇年代に国策として遂行された地域開発——一九三四年の凶作を機に、国家が初めて行った総合的な地域開発である東北地方振興計画——の立案過程を、人口問題の面に着目しながら検討する。当初、第一期計画では「過剰人口」問題の解決を課題として抱えていたのであるが、一九三七年の日中戦争の開始とその長期化を機に第二期計画では今度は「人口増殖」が課題となる。一連の議論を詳細に辿ることで、中央と地方の認識のズレや相互の緊張関係等が浮き彫りにされる。

ホブソン論文では、「東北学」の提唱者である古代史家・高橋富雄の東北研究を、一種の「戦後思想」として捉え、その営為と変容とを併せて検討する。戦後、それまでの皇国史観に代わってマルクス主義史学が急速に台頭するという状況にあつて、高橋はその「世界史の基本法則」を用いながら、しかし「地域第一」という立場を貫くことで「日本」を相対化しようと試みた。その後、高度経済成長長期に至つて、「戦後」に対する希望を失い始めた高橋は、八〇年代初頭から梅原猛・上山春平・梅棹忠夫といった「新京都学派」と接点を持ち、これにともなう東北像の変容が九〇年代の「東北学」への道を開いたとする。

ルアレン論文では、研究者（文化人類学者、とくに「アイヌ学者」）

がその研究対象としてのホストコミュニティ（アイヌ社会）とどのように関わってきたのか、その関わり方にはどのような問題があったのか、そして今後どのように関わるべきなのか、といった諸点を自身の経験や近代日本の人類学の来歴、アイヌ側の苦悩と抵抗等を踏まえながら考察する。その上で、学問上の正確さとホストコミュニティの要求との双方に対して敬意を払う、より発展した人類学の方法を模索する。

3 若干の論評

評者は、これまで、この類いの論文集を通読したためしがほとんどない。大抵は、関心のあるテーマについて取り上げた論考だけを読み、それで読んだことにしてしまふ。今回、書評ということ、本論集を通読してみると、これまで知らなかった興味深い研究テーマに数多く接することができ、日頃の自分の「偏食」傾向を反省する良い機会となった。以下では、本論集の成果と課題について、若干の論評を試みたい。

各論考は、前述の要約からも分かるように、基本的には時系列上に配されている。ただ、別の切り口から見ると、(1)「地域」の実態、解明を志向する論考と、(2)「地域」認識（イメージ）の機能を検討する論考、(3)「地域」の実態・認識双方を扱う論考、という三つに便宜的に分けることができるのではないか。すなわち、(1)が浪川論文・芳賀論文、(2)が岩本論文・鈴木論文・川内論文・ホブソン論文、(3)が吉村論文・河西論文・佐藤論文・ルアレン論文、というように。また、第Ⅲ部全体の表題である「地域の発見と主張」は、ちょうどこの(2)と

(3) に関わる視角と言える。

(1) は、諸関係の総体としての「地域(社会)」の様態を、とくに「危機」とそれへの対応の局面に着目して再構成する。それに対して、(2) は、目標設定や正当化論拠や研究対象等の認識の次元において、どのような「地域」イメージ——換言すると、人々の意識や行動を規定する認知的世界——が召喚されたのか、という点に留意する。(3) は、内憂外患や民権運動や史料・フィールド調査等を対象とすることで、この(1)(2)の双方(あるいは、相互作用やズレ)を跡付ける。

これらの(1)〜(3)を長いスパンで検討することによって、テーマや素材や書き手の多様性のみならず、「地域」の捉え方、——さらに言えば、「捉え方」の捉え方をも含み込む——多様性や重層性が浮かび上がってくる。本論集を繙くことで、読み手——このような論集の読み手は、往々にして手持ちの素材を有する書き手(研究者)でもあるわけだが——は、「地域」の捉え方について有益なヒントを得ることができるとではないか。この点が、本論集の最大の収穫であると評者は考える。

本論集における各論考の完成度は、このようにかなり高く、それぞれに読み応えがある。ただ、他方で、この「各論考の完成度の高さ」は、本論集全体の読みやすさとは必ずしも比例しない。というのは、個別事例を詳細に検討した論考が多く、各論考の冒頭で参照される研究史(先行研究)も末尾で提示される今後の課題も、基本的には各論考で中心的に扱う分野史に直接関係する内容に終始している。つまり、前述の①②③の本論集における大胆かつ斬新な課題設定と、各論考の堅実かつ詳細な研究史・課題との間のつながりがほとんど明示されていないため、各

論考同士の関係や論集全体として打ち出したい流れや像が読み手には把握しづらいのである。

その「流れや像」として、本書の「序」や「跋」に言及される「グローバル化の歴史的意味」(六頁)や「狭い地域を飛び出してグローバルな連関を呼び込む地域史」(三二二頁)等を想定(期待)して各論考を読んでも、今一つ判然としない。そもそも、各論考のなかで「グローバル化」やそれに類する用語を使用するのは、管見の限り浪川論文(一六頁・四二頁)と佐藤論文(二〇三頁)とルアレン論文(三〇五頁)だけである(しかも、浪川論文では、「プレ・グローバル化」といった使い方であり、「グローバル化」そのものではない)。また、内容を見ても、少なくとも第II部までの論考については、旧来通り「近代化」の過程(紆余曲折)や諸局面といった括り方でかなりの程度しっくり収まってしまふ、という印象さえ受ける。むしろ、それは、本論集(及び既刊の論集)が批判する「国家単位の歴史学」への「地域」の回収を意味しかねないため、本論集が目指す方向ではないだろう。この点で、前述した本論集の「地域」の捉え方の多様性・重層性という成果を踏まえて、改めてそこから国家史の相対化・再編成や「グローバルな連関」を浮き彫りにするための具体的な手立ての模索や叙述の工夫が求められる。

各論考で取り上げられた地域の様相から、世界史像や日本史像についてどのような眺望が見えてくるのか。各論考の内容や研究方法は、他の時代や他の地域や他の人物の研究にどのような示唆を与えるのか。あるいは、既刊の二冊の論集の成果や課題と、今度の各論考とはどのように関わるのか。これらの課題についての——個別の分野史を越えた——問

題提起や射程や展望が、それぞれの書き手自身によってもう少し積極的に提示されていたならば、読み手が論集全体によりアクセスしやすい構成になったのではないか、と思われる。この点は、各論者が充実していただくために、却って勿体なく感じた。

さらに、本論集の課題設定それ自体について強いて一点指摘すると、隣国の歴史の研究動向についての言及がほとんどない点はやや気になった。評者の見るところ、隣国についての歴史研究の動向にも、本論集の視角と似たような試みや潮流を見出すことができる。

例えば、明清史研究者・岸本美緒氏の、地域社会論の不定型性や「方法的個人主義」等の解釈モデル群である⁽⁸⁾。これらの解釈モデルは、外的あるいは鳥瞰的な観察に立脚した発展段階論や国家論等に対して、むしろ個人の主観や動向から社会や権力の動きや秩序の形成・揺らぎ等を捉えるための手立てとして提示されている。日本の事例にも援用できそうである。今後、この辺りの議論と「対話」していくと、さらに実りのある成果が生まれるのではなからうか。

おわりに

ここまで、本論集の内容を紹介し、その上で若干の論評を試みた。評者の能力と紙幅の都合から取り上げることのできなかった論点も数多く存する。了承されたい。いずれにせよ、地域史をグローバルな視野から丹念に掘り下げることで日本史像・世界史像の再編成（捉え直し）を企図する本論集に提示された多様な成果が、前の二冊の論集の諸成果も含

めて、それぞれの書き手や読み手によってどのように総合されるのか。そこから、さらに、如何なる展開や拡がりが生まれるのか。今後の動向を、刮目して俟ちたい。

註

- (1) 編者は、河西・浪川両氏と、M・ウィリアム・ステイール氏の三人。
- (2) 編者は、河西・浪川両氏と、デビッド・ハウエル氏の三人。
- (3) 河西英通「地域史の視点と展望―地域歴史学をめざして―」（前掲『ローカルヒストリーからグローバルヒストリーへ』序章）、同氏『周辺史から全体史へ―地域と文化―』―到達点とさらなる方向性―（前掲『周辺史から全体史へ』終章）。
- (4) 浪川健治「多文化主義と歴史認識―グローバルな地域史の枠組み―」（前掲『ローカルヒストリーからグローバルヒストリーへ』終章）。
- (5) 浪川健治「『周辺史から全体史へ―地域と文化―』―その視角と方法―」（前掲『周辺史から全体史へ』序章）。
- (6) 河西氏前掲「地域史の視点と展望―地域歴史学をめざして―」、「『周辺史から全体史へ―地域と文化―』―到達点とさらなる方向性―」。
- (7) なお、歴史学（とくに、「アジア」を対象とした）における「地域」概念の多様性については、岸本美緒「アジアからの諸視角―「交錯」と「対話」―」（同氏『風俗と時代観―明清史論集1』研文出版、二〇一二年）を参照。
- (8) 同氏『明清交替と江南社会―17世紀中国の秩序問題』東京大学出版会、一九九九年、序。

(A5判、三二六頁、岩田書院、二〇一三年五月刊、

価格七四〇〇円〈税別〉)

(しみず・みつあき 東京大学大学院)